

テーマは「**優しさ**」福祉について考えます。 優しさ通信NO. 1
ここでは障害者のことを、「障がい者」と記しています。ご理解ください。

平成30年 **6**月の**優しさ**通信



「シニア 64 歳から」 5 年で 2 歳上昇 働き手増え意識変化
・ 20～74 歳の男女に「何歳からシニアだと思うか」と尋ねたところ、回答は平均で 64.2 歳でした。62.4 歳だった前回の 2012 年調査から約 2 歳上がりました。
(2018 年 5 月 8 日 日本経済新聞記事から抜粋引用)



精神疾患患者 26%拘束経験 「48 時間以上」最多 30.9%

障がい者家族ら調査「説明不十分」の声

- ・ 統合失調症をはじめとする精神疾患患者の 26%が、医療機関で身体拘束を受けた経験。
- ・ 身体拘束を受けた期間は、「48 時間以上」と答えた人が 30.9%に上り最多。「24 時間以上 48 時間以内」は 17.0%。
- ・ 精神科病院では、患者が自らを傷つける恐れがあると指定医が判断した場合などに限り、精神保健法で拘束や隔離が認められています。
- ・ 欧米では精神疾患の患者の身体拘束は稀で、あっても 20 時間が限度です。
- ・ 身体拘束や施設された部屋での隔離を受けた入院患者は 2014 年時点で 10,682 人。10 年間でほぼ倍増しました。(2018 年 5 月 10 日本経済新聞記事から抜粋引用)



「認知症恐れ」運転 悩む警察 事故との因果関係は不明瞭

7000 人該当、免許更新で新たな課題

- ・ 警察庁が 2017 年 3 月、認知機能検査で早期発見を進めた結果、「今後、認知症の恐れ」のドライバーが約 7000 人に上ることが判明。
- ・ 75 歳以上が加害者となる死亡事故は 2017 年に 418 件発生。死亡事故に占める割合は 10 年前に比べ 4 ポイント増の 12.9%に上昇。
- ・ 認知症リスクの恐れがある高齢者を一律に免許取り消しにできない背景には、認知症と運転の危険性の因果関係が医療でも確立されていない点があります。自主返納は 5%。
- ・ 2017 年の自主返納は前年比 1.5 倍以上の約 25 万人と過去最多を更新したとはいえ、高齢運転者の 5%にすぎません。
- ・ 2020 年末の 75 歳以上のドライバーは推計 600 万人。
(2018 年 5 月 24 日本経済新聞記事から抜粋引用)

テーマは「**優しさ**」福祉について考えます。 優しさ通信NO. 2
ここでは障害者のことを、「障がい者」と記しています。ご理解ください。



終末期治療の希望 「延命より痛み緩和」6割

「家族と話し合い」4割止まり

- ・延命治療ではなく苦痛を取り除く緩和治療を希望する人が6割に上ることが、日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団の調査でわかりました。
 - ・「人生の最終段階でどのような治療を受けたいか」との設問には、「生命を長くするより、痛みを取り除く治療を希望」が58.1%に上りました。「苦痛を伴っても病気に対する治療（延命治療）を希望」との答えは10.9%でした。「わからない」は18.3%を占めました。男性よりも女性の方が緩和治療を希望する割合が高く、年齢が高くなるほど緩和治療の割合が高まりました。
 - ・家族と話し合ったことがあるか聞いたところ、「詳しく話し合っている」（7.1%）と「一応話し合っている」（35.5%）を合わせ4割にとどまり、「話し合ったことがない」が半数を超えました。
 - ・「終末期を自宅で過ごしたいか」との問いには、7割以上が自宅を希望。
 - ・配偶者の死を巡る質問では、「自分が先に死にたい」が62.7%。男性（78.3%）は女性（49.9%）を大きく上回りました。
- （2018年5月22日日本経済新聞記事から抜粋引用）



「飲み込む力」鍛えて 早期対応で「口から食」長く 喉の仕組み理解し訓練を

- ・加齢に伴うのどや舌の筋力低下などによって口からうまく食べられない「嚥下障害」の患者は、誤嚥性肺炎などを発症するリスクが高まります。
- ### のど仏を動かす
- ・のど仏の部分（咽頭）が上がると食道の入り口が開く一方、誤って唾液や飲食物が入り込まないように気管や鼻の入り口が閉じます。
 - ・飲み込む力を高めるには、のど仏を動かす訓練が有効です。
 - ・「飲み込み力」の低下が分かる症状・・・①痰がのどによくたまる②唾液が多いと感じる③声の感じが変わった④食事中や食後によくむせる⑤咳払いが増えた⑥寝ている時によく咳をする⑦飲み込むときにひっかかる感じがする⑧喉が詰まった感じがする⑨液体の方が固形物よりも飲み込みにくい⑩食べ物や飲み物が鼻に流れる
- （2018年5月28日日本経済新聞記事から抜粋引用）



今月の福祉用具－移乗関連用具

その6 移乗動作で使用される用具

簡易スロープ

- ・車いすなどの移動の際、段差に乗せて使用する取り外し可能なスロープ。
- ・適当な傾斜を得るためには、高さに応じたスペースが必要。
- ・斜度をできるだけゆるくしないと介助負担が大きくなるので、段差が40cm以内であると使いやすくなります。
- ・2本のレールを敷くタイプ（レール型）と、フラットな板状のタイプ（フラット型）があります。強化プラスチックやアルミ合金などで構成され軽量化が図られています。

①レール型

- ・2本1組で、強度を増すためと車輪が外れないようにするために縁がついています。
- ・走行面にはすべり止めの素材が貼ってあります。
- ・ほとんどのものがアルミ合金製で、長さが2mのもので1本5kg程度。
- ・収納時には半分の長さになるスライドタイプもあります。
- ・20cm以内の段差であれば勾配も小さくなり介助負担も軽くなります。
- ・介助者は左右のレールの間を歩きながら車いすを昇降させることとなります。

②フラット型

- ・三つ折りや四つ折りできるアルミ合金や強化プラスチック製のものや、組み立て式で丸めて携帯できるアルミ合金製のものなどがあります。
- ・走行面にはすべり止めの素材が貼ってあります。
- ・長さは最大で6mのものもあります。
- ・重量は8～60kg程度で、長さにより異なります。
- ・介助者もスロープに乗ることができます。

※使用上の問題点

- ・レール型は左右別々に運ぶことができるので、重さが半分になります。フラット型は一体なので別々に運ぶことはできません。
- ・レール型では介助者はレールの間を歩くので、段差が大きいと車いすが徐々に上方に上がってくるので、介助負担が大きくなる場合があります。

（参考：福祉住環境コーディネーターテキスト&福祉用具専門相談員研修用テキストより）